
IS < インフィニット・ストラトス > 漆黒の騎士と白銀の騎士

中司碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS<インフィニット・ストラトス>漆黒の騎士と白銀の騎士

【Nコード】

N8968Y

【作者名】

中司碧

【あらすじ】

女性にしか反応しない世界最強の兵器『インフィニット・ストラトス（IS）』の出現で世界は大きく変わった。
主人公の火神 雄は「世界で二番目のISを使える男」としてIS学園に入学することになる……。

初の二次創作です。小説というものの自体も初めて書く作品でもあるので、いたらない点があると思いますが、温かく見守ってください。
主人公が転校してきた時期は、『学年別個人トーナメント』のす

ぐ後になります。本作メインヒロインはセシリアで、徐々にデレて行く感じ？になります。オリエスですが、初期段階ではガンダム00の機体から引用しています。それ以後は完全オリジナルです。

「え、えーと……」

精神的にかなりヤバいんじゃないだろうか。

教室に入って十秒もかからないうちに悟った。

（こ、これは……想像以上だ……）

見渡す限り女子女子女子そして女子。

視界にはもうそれ以外映ってなどいない。

想像を超える光景に、オレは唖然と立ち尽くすしかなかった。

想像してごらん。自分以外は女子しかないんだぜ？

想像してごらん。男がオレを含めて二人しかない状況を。

想像し（ry

ダメだ。埒が明かない。この状況を打破するにはどうしたらいい！！

チヨンチヨン

ん？な、なんだろ。軽く脚を突かれたぞ。

目線を少し下に降ろすと、そこにはもう一人の『男』がいた。

「世界で唯一ISを使える男」こと、『織斑一夏』その人である。

混乱しているオレを見かねてか、心配そうにこちらを見ている。

そして口パクでこう言った。

「がんばれ」

暖かいお言葉ありがとうございます先輩！

いや、実際は同年なわけなので先輩も後輩もないんだけど。

「スーッ、ハーッ」

一度深呼吸をして不安を頭から取り除く。

こんなことで取り除けるわけもないが、頭を切り替えることはできる。

深く深呼吸をして、いざ出陣の時！

「きよ、今日から、こ、この学園に転校してきましたかがみゆう火神雄です。
よろしく願います」

出だしがちょっと失敗したが言い切ったぞ！
偉い！偉いぞオレ！よくやったぞオ——

パァン！！

「痛つてえ！」

な、なんだ！いったい何が起きたんだ！？

いきなり頭を叩かれて、オレはまた混乱する。

そんなオレを呆れ半分で見ている教師が一人。

「火神、もう少しマシな自己紹介はできんのか」

そんなこと言っただって無理なものはむ――

パン！！！！

「イッテエエ！」

先程より二割増しで強く叩かれる。

それにしても名簿帳ってこんなに痛いものなんだな。高校生になつてから解ったことだ。

「まったく、周りを見る。もう少し期待に応える努力をすれ」

そんな無茶苦茶な……。

改めて周りを見ると、周囲からは物凄い期待の目線が送られてきている。

（へんな期待はしないでくれよぉ！）

「うつ……」

おいおいおい、そんなに期待しないでくださいよ皆さん。

「早く言え。まだ言っていないことがあるだろう」

「……え？」

まだ言っていないこと？な、なんだ……なんなんだチョコボ――

ゴッウン！！

「ダアアアア！痛いですよ！」

「死にたいか？」

「うぐう……」

織斑先生の鋭い吊り目がオレを睨む。

言っていないこと？そんなの――あ、あつた。

「思い出したか？」

「あ、はい……」

「なにになー？」

「早く言つてよー」

女子からまたもや期待の目線が送られる。

「あ、あの・・・一応・・・代表候補生・・・です」

「えっー!」

「ほ、本当!!」

「今度ISのこと教えてー!!」

言つた瞬間にクラス中の女子が騒ぎ出す。

「はぁ・・・」

織斑先生は頭を痛そうに抱えてため息をつく。

「こうなるのか嫌だつたなら言わせないでくださいよ・・・」

「後で騒がれるよりはマシだろう? お前も私も」

「じ、ごもつとも」

そこから質問攻めをくらうことを覚悟していたが――

「静かにしろ馬鹿者」

織斑先生の一喝で、すぐに騒ぎが静まる。

さすがにこの人に逆らおうなんて人はいないはず。

「キヤーもつと叱ってー!」

「どんどん罵って下さいお姉様ぁー!!」

ん？な、なんか逆らうどころか受け入れてるぞおい！？

「これだからガキは……」

またため息をする先生を見ていた副担任の先生は、鎮圧しようとする。

「み、みなさん、今はSHRの時間なので静かに!」

かなり大きな声をだすがうるさ過ぎて届かない。
しかもそんな生徒の反応のせいかな、なぜか泣き出しそうだ。

「あ、あの……先生……?」

「う……火神君、私どうしたら……」

「いや、あの、泣かないでくださいよ先生!」

「だって、私なんかじゃ……」

今にも泣き出しかねないこの人……。

「と、とりあえず先生の名前は?」

とつさに思い付いた言葉を口にだす。

「わ、私ですか?」

「グスン」と、なんとか泣き出すのを堪えて自己紹介してくれた。

「副担任の山田真耶です。今日から三年間、頑張りましょうね」

「は、はい」

涙を拭いて、ニコツと笑ってくれた。

まあ、ちよつと無理矢理感があつたが、そんなことを言つたらまたさつきと同じことになる。

そのため、このツッコミは心の中でしょう。

六月もくれにさしかかり、どんどん外は暑くなってきた。

だが、それでもまだ蒸し暑いと言うよりは過ごしやすい暑さといった感じの温度だ。

その暑さも教室の中ならここちいい。

そう、眠りを誘う程に。

スパアン！

「うがっ！」

「転校そうそう私の授業で寝るとはいい度胸だな、火神？」

ヤバイ、織斑先生の授業で寝てしまった！

「あ、あのお・・・オレ、寝てました？」

スパァン！！

「はい、すいませんでした。以後、気をつけます」

「わかればよろしい」

そう言って先生は教卓に戻る。

不運なことに、オレは一番前の席になってしまったわけで、寝ていたらそっこうでわかる。

代償として一夏が左隣りにいるからまだよかった。

キンコーンカーン

先生が教卓に着くと同時に、三時間目の終了を知らせるチャイムが鳴る。

「以上だ。今日の授業はここまでとする。午後からは先日行ったトナメント一回戦の試合を消化する。昼食後は各自準備を整えておけ」

「・・・はい」

先生が教室から出るやいなや、女子たちがオレの周りに群がってきた。

「ねえねえ、火神君の専用機ってどんなの？」

「彼女とかいる？」

「趣味はなんですか！」

なんかもうどれに答えていいのかわからない。
オレは聖徳太子じゃないんだかな……。

「みんな、それぐらいにしてやれよ」

そこへ一夏が助け舟を出してくれる。

「えー、だって気になるんだもん」

「知りたいんだもん」

こらそこ、駄々をこねるな。

「まあまあ、それはまた今度にしようぜ」

一夏の説得により、オレの周りにいた女子たちは散り散りになって、どこかへ行ってしまった。

「助かった……」

「大変だな火神」

「織斑は随分と余裕だな？」

「俺か？俺は慣れただけさ。あと俺は一夏でいいぞ。ややこしいだ

る」

「それもそうだな。ならオレも雄でいいよ」

「わかった」

今改めて思う。このクラスに転校してきてよかったあ……。

小さな幸せを噛み締めていたら、

「二人ともー」

誰かが声をかけてきた。

「ん？なんだシャル」

「食堂に行かない？ほら、転校生君も連れてさ」

「いいなそれ。よし、じゃあ行こうぜ」

「え、あ、おう」

一夏と女の子に連れられて、食堂に向かうことに。

食堂に着いてそうそう、かなりの人数の女子生徒に驚いた。

「うわー、こう見るとまた凄いなこの学園・・・」

教室とはまた違う光景を目にしてまた啞然としてしまう。

「ほら、雄。早く並ぼうぜ」

「じゃあ僕はテーブル確保しておくね。静かに食べたいだろうから奥のほうで」

「あ、ありがとう。なんかゴメン」

女の子の配慮に思わず謝ってしまう。

「いってそんなこと。それじゃ、僕の分もお願いねー夏」

「おう、わかった」

女の子は足早に食堂の奥へ消えていった。

「優しいんだなあの子」

「シャルはけっこう気が利くからな」

「シャルって言うのか」

「ああ、そうか。雄はまだクラスの女子から自己紹介されてないもんな」

「そういえばそうだな」

一夏と喋りながらも列はどんどんカウンターに近づいていく。

「ところで雄の専用機ってどんなのなんだ？」

「オレの専用機？」

「なんか雄の専用機って凄そうでさ」

「いやいや、そんなクラスの女子に似た期待をしないでくださいよー夏さん。」

「そ、そんなに期待しないでくれよ。そう言う一夏の専用機ってどんなのなんだよ。『世界で唯一のISを使える男』、織斑一夏の専用機もそれ相応に凄いんだろ？」

「いやいやいや、俺の白式はそんなもんじゃないさ」

白式——一夏の専用機の名前だろうか？

「白式って言うのか。カッコイイな」

「んーまあ後で見せるさ」

そんな会話をしていたら、いつの間にか受け取りカウンターに着いていた。

カウンターで自分の頼んだ料理を受けとって、シャルがいる食堂の奥へ進む。

食堂の奥へ進むにつれて、生徒の数が少なくなっていく。

「食堂の奥って普段はあまり人いないんだぜ」

「やっぱ面倒だしな」

「でも今日みたいに天気の良い日は特別、窓際の席が埋まるんだ」

よく見れば奥に行けば行くほど人が増えてきた。

どうやらさつきまで歩いていた場所は食堂の中間辺りのようだ。

「おーい、一夏あー転校生くーんこっちこっち」

シャルと呼ばれる女の子がオレ達を呼ぶ声がしたのでそちらを見る。

キープしてくれたテーブルは窓際の景色が楽しめる所だ。

「スマン、シャル。ちょっと混んでたから遅くなった」

一夏は遅くなったことをシャルに詫げる。

「いいっていいって。早く食べようよ。冷めちゃうし」

「ほら、雄も座ろっぜ」

「おう」

料理が乗ったおぼんをテーブルに置いて椅子に座る。
オレの位置は正面に一夏、左隣りにシャルという感じ。

シャルの正面はちょうど埋まってないので景色が堪能できた。

「それじゃ食うか」

三人で合掌をして、

「いただきます」「」

そして各々の料理を食べる。

オレはざるそば、一夏は焼肉定食、シャルは肉じゃが定食をそれぞれ口にする。

「ここの学園って食堂のメニューが豊富だな」

「そうなんだよ。それにどれを選んでもハズレがないんだ」

「本当にこの学園の食堂って美味しいよね」

そんな会話をしつつも箸は止まらない。

ちよっ于行儀は悪いが、少し話したらまた食べるのに集中する。

「」「ごちそうさま」「」

三人一緒に食事を終えたら、次は自己紹介へ。

「まだ自己紹介とかまだだったよね」

「そついえばそうだな」

「僕はシャルロット・デュノア。フランスの代表候補生なんだ。よろしくね、えーと……」

「雄でいいよ。こちらこそよろしく頼む。えーと……」

「シャルでいいよ。シャルロットじゃ長いだろうし。よろしくね雄」

ニツコリと微笑んでくれた。

中性的な顔立ちで、金髪を首の後ろで束ねている。『僕』とは言っているが、制服はちゃんと女子のモノを着ていた。

格好は別として、見ようによつては男にも見えてしまうので、何か変な違和感を感じがしてしまう。が、そんなことを考えていたら、その笑みに意表をつかれ、ついつい可愛いと思ってしまう。

「さて、自己紹介も済んだことだし、まだ時間もある。これからどうする？」

「んー学園を案内してあげたらどうかかな？」

「それは名案だな」

おお、こちらから頼もつと思っていいたらあちらからお誘いを受ける

とわ。

あれ、でもたしか午後からは――

『これより、先週行われた学年別トーナメントの一回戦をする。前回試合を行っていない一年生は準備しろ。以上だ。』

ブツンと、突然の放送に食堂全体がシーンとなった。

「今のつて織斑先生だよな？」

「ああ、そうだな」

何故か一夏は悠長にお茶をすする。

「ふ、二人とも大丈夫なのか？」

「うん？なにがだ？」

「な、何がって、今の放送だよ！」

「心配ないよ。僕と一夏は先週のトーナメントで一回戦は終わってるから」

あ、そうなの。それならなんの心配もないわけであり、今もこうして三人で温かい緑茶をすすっているわけで――

ブツン！

「な、なんだ！？」

スピーカーからまたノイズが聞こえてきた。

「一年一組の火神は至急、第二アリーナAピットまで来るように」

ブツン！

「は、はい？」

なにがなんやら状況を把握できていない。

必死に頭を働かせるが、頭の中が真っ白で何も考えられない。

「おい、雄一？」

「……は！」

一夏の呼びかけで意識が覚醒する。
それと一緒にある予感が遮る。

織斑先生……早く来い……。この二つのワードが意味するこ
とは――

「一、殺される！」

バツ！と、勢いよく席を立つ。

「ヤバイヤバイ！早く行かないと！」

あたふたと混乱する。

「落ち着いて雄」

「そうだ、まずは落ち着くんだ。深呼吸しろ深呼吸」

一夏に促されて、その場で深呼吸を二回、

「スーッハーツ、スーッハーツ」

落ち着け、落ち着くんだオレ！

「お、おおお落ち着いたぞお！」

「ぜ、全然落ち着いてないよ……。ところで雄」

「う、うん！？な、なんだシャル？」

「第一アリーナの場所はわかってるのかな？」

「……………あ。」

今更だが、オレはまだ学園内を詳しく把握していない。

そんな状態で学園内をうろついているのは、いつまでたってもたどり着かないであろう。

「い、一夏！シャル！ば、ばばば場所を教えてください！至急だ！こ

れは生命にかかわる!!」

「随分と物騒なこと言う人だね君」

クスツとシャルが笑う。

「雄、安心しろよ。俺達が案内する」

「あ、ありがとう!」

オレは半分グズリながらお礼を言う。
いや、もうグズツてます。

「そうと決まれば早く行こうぜ」

食器を片付けて、一夏とシャルは先程と同じように第一アリーナのAピットに案内してくれた。

プシューツとスライドドアが開かれて、オレと一夏とシャルは第一アリーナのAピットに到着。

「ん? 何故お前たちも一緒にいる?」

「雄はまだ学園内を把握してないんだから、一人で来るのは酷だろ

千冬姉」

パシーン！ オレは今日で何回この光景を目の当たりにしたのだろうか。

「いつ！」

「学園では織斑先生と呼べと言っているだろうが」

お、鬼だ……。ん？ 今、『千冬姉』って一夏は言わなかったか？

「お、織斑先生ってまさか……」

「そうだ。この不出来な弟の姉だよ。だが今は教師だ。敬えよ？」

「は、はい！」

やっぱこの人は怖い。

逆らったら何をされるかわかったもんじゃないぞ……。

「あ、あのー織斑先生。時間があまりないんじゃないでしょうか？」

後ろから山田先生が出てきた。

「うむ、そうだ。火神、準備をしろ」

「じゅ、準備って……。なんのです？」

「これからお前のデータを取る。さっさとISスーツを着てこい」

「え、でもオレまだ専用機が……」

「安心しろ、手配はした」

「わ、わかりました」

オレは一夏に再度案内をしてもらい、更衣室へ走って行く。

「織斑先生」

「ん？なんだデュノア？」

「火神君のIS適性ってどのくらいなんでしょうか？」

「あいつの適性は――」

シャルの目の前から唐突に空中投影されたディスプレイが出てきた。

それを見たシャルは――

「こ、これって!」

「凄いですよね、火神君。IS適性がまさかのSですから」

そう、ディスプレイに表示されている適性ランクは『S』を示していた。

「適性はSだが、まだまだヒヨッコに変わりわない。まあ、今日は腕試しってところさ」

「ところで、織斑先生。相手がこの二人って、さすがに実力も出せずに終わってしまうんじゃない……」

山田先生が対戦表を見て言った。

その対戦表にはこう記されている。

『鳳鈴音、セシリア・オルコットVS火神雄』

「せ、先生！これじゃ雄が——」

「騒ぐなデュノア。言っただろう？腕試し——小手調べさ」

そうは言ってもこれはやり過ぎではないだろうかとシャルは思った。だから納得ができない。

「納得できません！先生は雄を買い被りすぎです！」

「ああ。そうかもな」

「な、なら——」

「だが、期待もしているのさ。久々に骨のあるヤツがいるのでな」

「……」

そんな先生の気迫に押されてか、シャルはそれ以上何も言わなかった。

いや、言えなかったのだ。

オレは今、第一アリーナの更衣室に一夏と着ている。

「よいしょつと」

IS スーツを着ようと制服を脱ぐ。

「なあ、雄」

「なんだ？」

一夏が突拍子もなく話かけてきた。

「雄の両親ってどんな人なんだ？」

「オレの・・・両親・・・か？」

「あ、話たくないなら無理して言わなくてもいいんだぞ」

オレが一瞬迷ったのを察したのか、一夏は無理強いはしなとは言ってくれた。

「いや、無理はしてない。ちょっとな」

「そうか？ならいいんだが」

そうして更衣室に沈黙が訪れる。

そして、その沈黙を破るようにオレは語り出す。

「率直に言うと、両親はいないんだ」

「いない？それって……」

「母さんはもう亡くなってる……」

「す、すまん」

「いいよ、謝らなくても」

「だ、だがなあ」

「人がせつかく話てるんだ。最後まで聞いてくれよ」

一夏は戸惑ってはいたものの、決心がついたのかオレを見る目が真剣なものに変わった。

「わかった。最後まで聞く」

「ありがとう」

一息おいて、また話を再開する。

「父さんは行方不明でさ。安否不明ってことになってる」

「なんか俺と似てるな」

「一夏と？」

「実は俺と千冬姉は両親に捨てられてな。だから雄の気持ちも少なからずわかる」

「そっかぁ・・・」

まさか一夏とこんなシリアスな会話をしようとは思ってもみなかった。

「・・・・・・・・・・」

またもやしばらく沈黙が訪れる。

・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・。

・・。

もう何分経ったかわからない。それぐらい沈黙が重く感じられるほどだ。

ガチャン

制服からISスーツに着替え終えて、ロッカーを閉める。

「準備はできたか？」

「ああ、できた」

「こんな暗い感じで出たらダメだな」

「うん、たしかに」

「よし、今は目の前のことに集中しよう!」

一夏がテンションを上げるために声のトーンを上げた。

「そつだな!そつしよう!」

意気揚々と更衣室を後にした――

「遅れてすいま――」

スパーン!

「遅い!」

スライドドアが開かれた瞬間、オレの目の前には名簿帳が現れた。

「す、すいませんでしたあ……」

「まったく、着替えるだけで時間をかけるな馬鹿者」

今日つてあれか、厄日なのだろうか?

「準備ができたのならこっちにこい。今からお前に支給されるISを選んでもらう」

「選ぶって……そんなにあるんですか？」

たしかに貴重なデータを取るために今までだって色々な企業からそのような誘いはあった。

ここにきてそれは変わらないようだ。

「選んでもらうと言ったが……お前が専用機を持つまでの間、学園から特別に支給されるISだ。この二機から選べ」

そう言っただけの前には二機のISが立っていた。
いや、待っていたのほうがいいだろうか。

一機は純国産ISの『打鉄くうちがね』だ。

純国産の第2世代型IS。機体カラーは黒色を基調としていて、アーマーがまるで鎧武者のような形態をしている。

たしか防御に特化したISのはず。

第2世代ISは安定性と扱い安さが売りの世代。

こいつはなかなかいいかもしれない。

二機目は『ラファール・リヴァヴ』疾風の再誕だ。

デュノア社製の第2世代型IS。操縦しやすく汎用性が高い。外見上の特徴は、ネイビーカラーをした4枚の多方向加速推進翼。

うーん。どちらも今のオレには申し分ない。

一応、日本の代表候補生と言っても、実はISを操縦した経験は全くないのだ。

実に恥ずかしい限りである。

候補生なのに専用機もなく、その上経験もないときたもんだ。

知識はそこそこあるが、これも役に立つかどうか危ういな……。

こんなんで、何故IS適性がSなのか自分でも疑問に思う。

(うう……情けないなオレ)

「火神、早く決める。時間がない」

「あ、はい。それならう——」

「ちょっと待った」

ピットにいる全員が入口の方を見る。

そこには真っ白な白髪で眼鏡をかけ、白衣を着ている男が立っていた。

「あなたは……」

「な、なんで先生が一年生の試合に？」

織斑先生と山田先生の両方がその人を見て驚いている。

「なぜ整備科の先生がこんなところにいるんですか？」

織斑先生が白衣の男に疑問を述べる。

「うーん、強いて言うなら……。そうだな、大事な『息子』の初陣だから。では駄目ですかね？」

「なるほど。では二年生の試合は大丈夫なんですね」

「ああ、もちろん。それに僕がいたって邪魔でしょうし」

そう言いつつ、白衣を着た男は苦笑いを浮かべた。

そしてオレはというと――

「・・・・・・・・・・は？」

見ての通り放心状態である。

なんでだ？なんでオレの目の前には『父親』がいる？

もう、十年も会っていなかった人がここにきて突然現れやがった。

「久しぶりだな雄。さすがに十年も会わないと、背は伸びてるものだなー」

言いながらオレの頭をくしゃくしゃとかく。

「イテテテッ！痛いって父さん」

ドスッ！

「イツッ！！！」

さっきまでかきむしっていた手で、オレの頭にチョップを入れられた。

「ここでは『天桐^{あまぎり}』先生と呼べ」

「は、はい……………」

うん、やっぱり厄日だな。

十年ぶりに会って、早速チョップを食らわす親なんてどこの世界にいるんだよ……………まあ、ここにいたけど。

「あれ、でも雄の苗字って火神だよな？」

一夏がその疑問にいち早く食いついてきた。

「ああ。オレが名乗ってるのは母さんの姓だからな」

「なるほど」と、納得した一夏であるがまた疑問が浮上してきたのか、再度質問しようとした矢先、

バシンッ！！

「時間がないと言っている。この馬鹿者」

「す、すいません・・・」

おお、哀れな一夏よ。今のオレには救える術がない。許しておくね。

「か、かなり時間も押しているので早く準備をしましょう！」

山田先生は慌てて作業に取り掛かる。

「機体のほうは僕が用意したのを使え。既にパーソナルデータの力は済んでる。あとは初期化フォーマットと最適化フィッティングを完了させるだけだ」

「わ、わかった」

天桐の後ろから布に覆われたなにかが現れる。

その何かは言うまでもなくISであろう。

天桐はバサッと、布を取り、オレの前にはISが姿を現す。

「これがオレのIS？」

「そうだ。だがあくまで仮専用機だ。ちゃんとした物ができるまでの間、当分はコイツで我慢してくれ」

ソイツはオレを待っていたかのように、現れた。

現れたのは打鉄だ。要所要所が若干異なっている程度で、あとは変

わらない。

変わっている部分は、打鉄とは違い背部にコーン型のスラスタが設置されている。

見た感じはこれがメインスラスタであろう。

その背部スラスタに連結された形で二つの小型スラスタが見え、そこから小さな銃口が見える。

どうやらこのスラスタ内に各一門ずつキャノンかなにかが内蔵されているようだ。

「こいつは『裂魁<サキガケ>』。急ピッチで仕上げた打鉄の発展機だ」

「ということは第2世代型ISってことですよ？でも相手の凰さんとオルコットさんは第3世代型ISですし、データを取るにしてもここはやはり同世代型同士で戦わせたほうがいいのでわ？」

山田先生が率直な疑問を天桐にぶつける。

「打鉄の発展機と言ったが、裂魁のスペックは現行の第3世代型を圧倒的に凌駕する。これを見れば一目瞭然さ」

そう言つて、空中投影のディスプレイが天桐の前に表示される。

そこに表示されたのは裂魁のスペック表だ。

「う、これって!?!」

山田先生がスペック表を見て驚く。

「ほう。なかなかの機体ですね先生」

同じものを見た織斑先生はさほど驚いていないようだ。

「うわ、この性能すごい！特に機動性がずば抜けてる」

シャルも山田先生と同じく驚く。

「ほ、本当だ。これはすごいな」

一夏も二人同様の反応を示す。

「雄、早くしろ。武装は自分で確かめて使え」

「わ、わかった」

急かされて、オレは裂魁に身をゆだねる。

装甲のあちこちが慌ただしく動いているのが直に感じられた。

「すぐに慣れる。今のうちにセンサーに異常はないかを調べておけ」

言われた通りにハイパーセンサーを起動させ、確かめる。

「システムオールグリーン。異常なし」

今だISの装甲はキチキチと色々な処理を行っていて、少し耳がうるさい。

「火神、準備が出来たならカタパルトにセットしろ」

オープンチャネルで織斑先生の声が聞こえる。

「了解です」

ガチンッ！

オレは腰を落として偏向重力カタパルトに両足をセットする。

「雄」

今度は父さんからのプライベートチャネルだ。

「なんだよ？」

「一つ言い忘れていたことがある」

言い忘れたこと？ いったいなんだろうつか。

「どんなことだよ？」

「裂魁に搭載されている動力源についてだ。そいつには『ISNDライブ』と呼ばれるものが搭載されている」

「な、なんだそれ？ 聞いたこともない」

「言うなればソイツは『ISのコア』だ。これは母さんが研究し開発したコアでな」

「母さんが！？」

「そうだ。そして母さんはそれを守るために……お前に託すた

めに殺された」

母さんがそんな物を作ったせいで死んだなんて知らなかった。

オレは実験中の不慮の事故としか聞いていないため、詳しいことは何にも知らされなかった。

だから特に深く考えずにいた。

それがここにきて『殺された』だって？

なんだよそれ。納得できない。できるわけもない。

「今はこれ以上は言えん。その時がきたら言う。今はやるべきことをやれ、いいな」

「・・・・・・わかった」

一旦深呼吸をして、頭の中にあるモヤを取り除く。

（出来るだけ今は目の前のことに集中しないとな）

深呼吸をすること三回、空中投影ディスプレイに『Ready』の文字が浮かぶ。

「雄、頑張れよ」

一夏からオープンチャネルが入る。

「やれるだけやるさ」

文字が『Go』に変わる瞬間、オレは一気に機体を加速、第一アリーナへと飛び出した。

「さて、お手並み拝見といこうじゃありませんか、天桐先生」

「ええ」

二人の教員が、なにか期待をしているような会話が交わされる。

そして、戦いは始まる。

音もなく忍び寄る影に気づかぬままに――

「遅い……」

「遅いですわね……」

第一アリーナのステージではまだ来ない対戦相手を待つ中国代表候補生の凰鈴音鈴とイギリス代表候補生のセシリア・オルコットがいた。

「どんだけ待たせるきよ転校生わ」

鈴は一組ではなく二組だが、さすがに転校生の噂は耳にしているよ

うだ。

「ところでセシリア、転校生ってどんなヤツよ？」

ここで話は今日きたばかりの転校生の話題に。

「火神雄、日本の代表候補生とか。まあ、それなりに、普通ぐらいには格好よかったですわよ。・・・一夏さん程ではありませんが」

所々を強く強調し言うが、最後の部分だけは小さく呟く。

「へー。なるほどね」

あまり興味がないのか、鈴は素っ気なく返事を返す。

「とりあえず早く来ないかしら。暇でしょうがないわ」

「ですわね。さすがにこのままでは退屈します」

今か今かと対戦相手の転校生を待つ二人。

十分後――。

会場となるアリーナの観客席もだんだんと騒ぎ出してきた。

「まだかなー？」

「かなり期待してるんだけどねー」

「どんな専用機なんだろうー？」

観客席ではそんな会話が絶えず続いている。

観客の生徒たちも今か今かと待ち侘びているようだ。

「遅い！遅すぎる！！ 何やってんのよ転校生！！！」

「鈴さん。淑女たるもの、いつも使途やかになくは男性にモテませんわよ」

「な、なんですって！ 誰のこと言ってるのよ！」

「もちろん、わたくしの隣にいる人に言ってるに決まっていますわ」

「あ、あんたねえ……」

まだ来ない対戦相手に対しての苛立ちと、セシリアに言われたことに対しての苛立ちが混ざり合って、鈴は怒りだす。

「いい度胸ねセシリア。ここでアンタと戦ってもいいのよ。どうせデータを取るだけだし。それに私が勝つに決まってるんだから」

そう言っただけ鈴は大型の青龍刀2基を展開。そしてそれを連結し、器用にクルクルと回して構える。

「今の台詞、聞き捨てなりませんね。わたくしが鈴さんに劣ると？」

「ああ、聞こえなかったかしら？ 私はそう言っただけだったんだけどー？」

鈴に煽られたセシリアは、肩をワナワナと震わせて、怒り心頭のようだ。

「いいでしょう。その安易な考えで身を滅ぼすことになるですから。身の程をわきまえたほうがよくつてよ?」

セシリアも鈴と同じように武器を展開する。

手に握られたのは、巨大なライフルだ。

それを鈴に照準を合わせて構える

セシリアも鈴を煽る。

その様子を見ていた観客の生徒たちはなんだなんだと騒ぎ出した。

「なにになに?」

「あの二人なんか様子変じゃない?」

「おお、仲間割れ勃発かー!」

それを見ていた生徒たちは、ワイワイと先程以上に騒ぎ出す。

「いいぞいいぞー」

「前哨戦開始かあー!」

だんだんと盛り上がってきたアリーナ内は、どんどん盛り上がってきた。

そんな生徒たちを余所に、鈴とセシリアは一触即発の臨戦態勢をとる。

「かかってきなさいよ?」

「あら、そちらからどうぞ？まさか、鈴さんとあろうつの方が怖じけづいたわけではないですわよねえ？」

「ふん、言ってくれるじゃない。いいわ、さつさと終わらせてあげる！」

言うが先に、鈴はセシリアに向かって突っ込んでいく。

「ハアアアッ！！」

連結した青龍刀を頭の上で回転させながら、その勢いで縦に薙ぐ。

「迂闊ですわ！」

セシリアは鈴のその行動を予期していたのか、予め展開していたシヨートブレードでカウンターを狙う。

「そんな小細工！」

鈴はお構いなしにそのまま一気に振り下ろす！

（もらった！！）

両者が同じように一撃が入るのを悟った瞬間、

ヒュンッ！ガキンッ！！

「な、なに！？」

「何事ですよ！？」

二人の間に何者かが突然現れた。

「少し落ち着こうか二人とも」

二人の武器を片方ずつ握られている刀で受け止めた。
右の反りの入った短刀でセシリアのショートブレードを、左も同様に反りが入った長刀で鈴の青龍刀をそれぞれ受け止める。

「ふんっ！！」

受け止めた二人の武器を力だけで振り払う。

「「キャア！？」」

ドーン！と、アリーナのステージ両端に衝突する鈴とセシリア。

「まったく、仲間割れなんてしないでくれよ。いきなりだからビツクリしたじゃないか」

ステージ中央で一人呟くISが一機——もちろんそれはオレだ。

「い、いきなり何すんのよアンタ！」

中国の代表候補生だろうか？は威勢よく立ち上がりオレに怒鳴る。

「そうですね！ 邪魔をしないでください！」

同じくイギリスの代表候補生であろう女の子が怒鳴る。

どっちが中国代表候補生かイギリス代表候補生なんてのは私見だ。

だが、髪の色やなんかでだいたいは予想がつく。

それにしてもなぜオレが怒られるんだ！オレが正義ではないのか？

「あー、惜しいなあ」

「面白そうだったのにー」

ブーと観客席から不満の声が聞こえてきた。

どうやら完璧にオレは邪魔物扱いらしい。

オレ……良いことしたはずだよな？

オレのジャステイスをその場にいる全員に否定されてしまうとは……
．．．なんと肩身が狭い。

今のオレは、アウエーで大量得点を決めたサッカー選手さながらの
嫌われようであろう。

「あ、あのー……す、すみません……」

困ったときは謝る。これしかない。

残念ながら、アウエーで大量得点を決めたサッカー選手のような防
弾ガラス並のハートは備わっていない。

思春期を迎えた今のオレは、些細なことで割れてしまう薄っぺらなガラス並のハートなのさ……。

「なんか腹立ってきたわ」

「奇遇ですね鈴さん。わたくしもですわ」

パリン！と今、オレのハートが粉々に砕け散る音が聞こえた気がしないでもない。

（だ、駄目だ。オレにこの状況は耐えられない）

『鳳、オルコット何をやっている。時間を押しているんだぞ』

アリーナ全体から織斑先生の声が響く。

ビクッ！と、名前を呼ばれて怯える二人。

やっぱあの先生は怖いよな……。

『いい度胸だ。試合が終わったらその有り余る元気を特別メニューの訓練で発散させてやろう』

それを聞いた代表候補生二人はまたもや喧嘩を始めてしまう。

「セシリア！ アンタのせいで私までとばかり受けたじゃないのよ！」

「な、ななななんですって！ 先に喧嘩を売ってきたのは鈴さんでしょう！」

お互いに顔を真つ赤にして怒りを現わにしている。

おいおい、また喧嘩かよお・・・。

いい加減にしないと――

『お前ら、いますぐ死にたいようだな・・・今からそっちに行くから待っている！』

ほらー、怒られた！

ってあれ？なんか、オレまでとばかり受けた！？

「「「やります！やらせてください！お願いですから！...！」」」

三人で織斑先生の怒りを鎮めるために謝りまくった。

「まったく。さっさと始める馬鹿共」

「「「は、はい！...！」」」

なんとか怒りを鎮めるのに成功したようだ。
三人同時に安堵する。

「な、なんとかなったわね」

「危ないところでしたわ」

「マジで今日は厄日だな...」

各々に安堵の言葉を漏らしたあと、

「「「はあ...」」」

一斉にため息も漏れた。

「さて、また怒られないうちにさっさと始めましょう」

鈴が再びステージ中央に戻る。

「そうですね——あ、あら？」

「どうしたのよセシリア？まさかさっきの怒号で足がすくんだ？」

「そ、そんなわけではありません！」

「じゃあどうしたのよ？」

鈴がセシリアに近づく。

ん？なんかイギリス代表候補生——セシリアと呼ばれていた女の子の様子が変だぞ。

オレも気になって近寄ることに。

「どうしたんだ？」

オレが吹っ飛ばした地点に行ってみると、吹っ飛んだ勢いで、足が変の方向を向いたまま、地面に埋まってしまったらしい。もちろん、ISアーマーごと地面にめり込んでいる。

「まったく、なにやってんのよ」

「ほら」と、言って中国代表候補生——鈴と呼ばれていた女の子が手を指し伸ばす。

「す、すいません」

申し訳なさそうに、その手を握る。

「引つ張るわよ」

「いつでもいいですわ」

合図をしてから鈴はセシリアを引つ張る。

「フンッ！……あ、あれ？なにこれっ！抜けないわよ！？」

もう一度力強く引つ張るが抜けない。

まさかISのパワーアシストがあっても抜けないほどに埋まったのか？

「はあ、はあ……何よこれ！ちよつとセシリア、アンタ太ったんじゃないの？」

「な、なななな何をおっしゃいますの鈴さん！しかも殿方の目の前で！」

また顔を真っ赤に染めて叫ぶセシリア。
さつきとは段違いに赤くなっている。

「あれ、まさか……本当に……」

「そ、そそそそんなわけありませんわ！！」

激しく否定するセシリアだが、この異常なまでの反応を言うことは、自白してるも同然であろう。

そしてオレをギリッと睨む。

「うつ・・・お、オレのせい・・・だよな・・・」

「当たり前ですわ!!」

ぶいっとオレから顔を反らされた。

「ちょっと転校生。アンタがやったんだから責任とりなさい」

なんか物凄く嫌な言い方するなこの子。

「わ、わかった。ほら、引っ張るから手貸して」

オレはセシリアに手を指し伸ばす。

「それがレディーに対しての態度ですの？」

ずいぶんと御立腹のようだ。この口調といい、性格といい、どこかの貴族出身なのだろうか。

「す、すまない。オレが悪かった」

困った時は謝る。これ常識。

「ふん。ま、まあそこまで言うなら仕方ありません。今回はこれで許してあげますわ」

言ってからオレの手をセシリアが握る。

「それじゃ引っ張るぞ」

「いいですわ」

合図をしてからセシリアを引っ張る。

「フンッ！」

ググググググ！！

かなり力を入れているはずだが、なんだこれ？
本当に抜ける気配がないじゃないか。

「こ、このお！！」

ググググググググ！！

オレは更に強く引っ張る。

「イタッ！痛いですわ！も、もう少し優しくしてくださいませんか？」

セシリアが痛さに顔を歪める。

「え！ああ、す、すまん。もう少し優しくする。」

さっきより二割程度の力を抜いてまた引っ張る。

「そ、それくらいなら、いいですわ……」

「そ、そうか？ならこのまま行くぞ？」

力を一定にしてそのまま引っ張り続ける。

グググググググググググ！

その様子を見ていた鈴が突然笑い出す。

「ぶっ・・・あはははっ！あ、アンタたち・・・なに？コントやってんの？」

な、なぜそこで笑うんだ！？　どこがツボにハマった！？

「な、なに笑ってるんだよ！」

「そ、そうですわ！」

オレとセシリアはその場で腹を抱えて笑い出す鈴に向かって怒鳴る。

「だ、だって・・・くっ！あ、アンタたち・・・ぷはっ！自覚、ないでしょう！あははははっ！！」

どうしたんだ？さっきの衝突でどこか打ったのか？

「自覚がないとはなんのことですのー！」

完全にツボった鈴に、セシリアが問い詰める。

「じ、自分達が言ってた、ぷっ！か、会話を思い、出し——あははははは！」

なんだ？オレとセシリアのやり取りを思い出す……。

ダメだ。全くわからん。

イギリスの代表候補生は気づいたようで、その顔がまたまた赤く染まっていく。

今度は耳まで熟れたいちごみたく真つ赤だ。

[illegible]

その様子に気がついた鈴は盛大に笑い出す。

「ダメ！もうダメ！我慢できなっ——あはははははははっ！！！」

何がなんだかサッパリなのはどうかやれだけのようだ。

よくわからないが、とりあえず鈴の口から漏れないようにしておいたほうがいいかもしれない。

「貴様等、何を遊んでいる！」

突然、スピーカーから織斑先生の怒声がアリーナ中に響きわたる。
今度は本当にヤバイ。早くどうにかしなければ！

「と、とりあえず、早く抜かないと！」

恐怖のあまり、半ば強引に出力や引つ張る強さを一切無視して、一
気に引っこ抜く事にする。

ヒュイイイイン！

「ちょ、ちよつと！火神さん！？」

メインスラスターの出力を最大噴射でセシリアを引つ張り出してしま
う。

ドォーーン！！

「あはははは・・・あ、あれ？」

笑いこけていた鈴は、いつの間にかいなくなった二人を探す。

「あ、いた」

鈴は反対側の壁際を見る。

そこは土煙がもくもくとたっていて、詳しい様子がわからない。

そして土煙の中では――

「イツテエ・・・」

「うう……」

ISごしだかわかる程度に背中には壁の感触があり、どうやら反対側まで吹っ飛んだらしい。

「ゴホツゴホツ、だ、大丈夫……か？」

「コ、コホツ、え、ええ、なんとか」

土煙がだんだんと晴れてくると、セシリアの姿が見えてきた。

どうやらオレはセシリアを抱き抱えた態勢で、壁に衝突ようだ。

ISを装着し、絶対防御が作動しているとはいえ、衝撃までは防げないようだ。かなり痛い。

「た、立てるか？」

「は、はい」

まだ土煙が晴れない中、セシリアを抱き抱えたまま立って、そのままセシリアを降ろす。

立たせようと地面に両足をつけたが、

「——イタッ！」

一度はちゃんと立ったセシリアだったが、どうやら足を抜いた時に、変な方向へ捻ったまま力ずくで抜いてしまったようだ。

「お、おい、大丈夫か？」

ISを待機形態に戻したセシリアに肩を貸す。が、それを拒むように再びISを展開しようとする。

「さ、さあ、早く始めませんと・・・ま、また織斑先生に怒られて・・・しまいますわ」

再度ISを纏おうとするが、足が痛むのか展開がうまくいかない。

「くっ・・・！」

倒れかけたところをなんとか抱き抱える。

「さて、保健室はどこだ」

「ちょ、ちょっと！降ろしなさい！」

セシリアはオレの腕の中でジタバタと暴れだす。

「わ、わたくしはまだ戦えます！あ、貴方なんて一瞬で——ッッ！」

「強がるなよ。プライドもあるだろうが、オレはこんな状態の女の子と戦って勝っても、うれしくもなんともない。むしろこんな状態の女の子をほっとけないだろ」

素直に聞き入れてくれるかはわからないが、真っ直ぐに女の子を直視して言う。

「う、うう・・・」

どうやら説得はうまくいったらしく、それ以上の抵抗はない。

「そ、そんなに見つめられては何も言えないじゃないですか」

「ん？」

「な、なんでもないです！」

何を言ったのかいまいち聞き取れなかった。気にも触ったのか、
またも頬を赤く染めて顔をぷいっとそらされた。

んーよくわからん。

なんやかんやで周りはずでに土煙から解放されている。

「ちよ、ちよっと！またコントでもする気？」

ISを待機形態にした鈴がこちらに向かってきた。

土煙が晴れ、事態を把握していないアリーナ中の生徒が騒然として
いる。

「いや、こんな大勢の前でするような芸は持ち合わせていない」

「なんだ。それは残念」

今のは聞かなかったことにしよう。

「あら。セシリア、こんな状態じゃ無理ね。今日は諦めなさい」

鈴がセシリアの足を見て呟いた。

ISの基本システムである慣性制御機能があれば、足を地面につけないことは可能だが、こんな状態では機体の制御も難しい。

『火神。様子がおかしいがどうした？』

織斑先生からオープンチャネルが入る。

「どうやら対戦相手の子が足を怪我してしまったようで……」

「

「はあ」と深いため息をつく先生。

『オルコットの状態は？』

「足をひねった程度なんでそこまで重傷ではないかと」

『そうか。火神、お前はオルコットを保健室まで運べ。鳳だけでもデータを取るぞ』

指示を出し、オープンチャネルがきられる。

「とりあえずピットまで送るわ」

「ああ、ありがとう」

こうしてオレはけが人を抱えてAピットに戻った。

「どうしたんだ!」

ピットにいた一夏とシャルがオレのもとへ走って来た。

「この子が足を捻ったみたいでさ」

「うわー痛そう。はやく保健室に連れてったほうがいいよ」

シャルも心配そうにセシリアを見る。

「火神。詳しいことは後で聞く。さっさとオルコットを保健室に連れてってやれ」

「え、あ、はい」

先生に呼ばれて、怒られると思っていたため、ちょっと反応が遅れてしまった。

「雄、場所わからないだろ?俺も一緒に行く」

「僕も一緒に行くよ。やっぱり心配だし」

「なら織斑とデュノアで火神を連れてけ。凰、お前は先にデータを取る。その後にでもいいってやれ」

先生からの指示をもらい、各自動き出す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8968y/>

IS<インフィニット・ストラトス> 漆黒の騎士と白銀の騎士

2011年11月30日19時18分発行